

第4回 森を育てる会勉強会（草本勉強会）報告

森の管理作業と草本（草花）の カンケイについて考えてみよう

森会の活動目的のひとつに「森を育てることで生き物のすみかをつくる」があります。私達は「20年後のカブ森」を考えた2000年夏のワークショップで「林床に季節ごとのさまざまな植物の開花がみられるカブトムシの森」という願いを語りあいました。

ではカブトムシの森ではどのような草本相を目標としてもつことが可能でしょうか？そのためにどのような作業をすればいいのでしょうか？

間伐が始まり、森の環境が大きく変わり始めた今、この課題を考え保全に活かしたく、勉強会を企画しました。 <世話役・報告 柴戸慶子>

【日時】 2002年7月27日（土） 10:00~15:30

【講師】 須田隆一氏

（福岡県保健環境研究所専門研究員）

【内容】 講義と林床植生調査



A. 現代の里山の保全に必要な3点

1. 保全生態学の知識

人は堆肥利用、薪炭の供給源などの目的のため長年経験的な知識で作業を行ない、結果として里山をうみだしていた。しかし、その目的や経験がない現代の里山保全では、遷移途中の場所が希少な生物のすみかとなっているという里山の価値の1要素を理解し、フィールドの現状を把握しながら保全を行なう必要がある。それは学問としては保全生態学という分野になる。

2. 保全目標に関する合意形成

ひとつの場所にはさまざまな関係者がいて、さまざまな思いがある。地域住民、行政などの関係者で、どのような植生にむけて保全するかという、保全の目標について合意を作る必要がある。その場として検討会・運営会議が必要になる。

合意の基礎のひとつがフィールドの現状を示す調査結果である。調査によって得られる科学的データ、そしてデータから導かれる保全生態学的な知見が、合意形成にあたっての重要な判断基準となることが求められる。

3. 実際の保全のとりくみ

合意された目標に向けて、地域住民、ボランティア団体、NPO、学校、行政などによる独自のまた協働の保全作業がおこなわれなければならない。何も実現できない。

B 里山の林床植生（草本や芽生え）の再生・修復における 調査の意義

1. 事前調査：対象とする森・近隣の森で行なう

↓↑

2. 分析、目標設定：調査結果とそれによって導き出される保全生態学的知見をもとに、再生・修復の目標をきめる。

↓↑

3.管理作業の実施：選択的下草刈、実生の育成などを行なう。

↓↑

4 モニタリング調査：作業後の状態を調査し、目標と照らし合わせる。
これをもとに今後の保全作業の内容について検討し合意をつくる。

C.里山の生物多様性の保全

生物多様性とは生態系、種、遺伝子の3つのレベルの多様性によりとらえられる。

2002年3月、国の「新・生物多様性国家戦略」が閣議決定し「里地里山の保全と持続可能な利用」が重要なテーマとしてあげられた。今後、県も国の方針をうけた施策を行なうことになる。

では、生物多様性と実際の里山の管理がどのようにかわるのか、事例をあげて参加者へといかけてみる。

a.英彦山で採ったコナラの果実を植えました。

b.近くの森に生育しているヤマツツジを移植しました。

c.近くの森に生育しているセンボンヤリの種子を採取・発芽させて植えました。etc.

答えはみなさんが考えてみてください。

D. カブトムシの森における林床植生調査

ー今後へー

草本調査の時期は春（4月後半）夏（梅雨の前半と盛夏）秋の年4回は必要。調査の結果をみてどのような草本植物を残すことが適当か検討することができる。カブトムシの森は湿ったところでその特徴に合った草本の保全を行なうことに留意してほしい。

△▽△ 勉強会を終えて ▽△▽

私たちは森を育てるボランティアですが、相手である森は寡黙です。

もの言わぬ自然の声を調査という会の皆で、また外部とも共有できる手段で聞くこと。現代のサイエンスの贈り物である「生物多様性の保全」を素人集団である私達が可能な範囲でうけとめること。これらが「生き物の多い森づくり」へ繋がっていくことを考えた勉強会でした。

この勉強会の趣旨である a.草本相の目標を考えてみる b.そのための管理作業を考えてみる、はaのとばくちまでたどりついたくらいで終了しております。今後の展開については皆さんの御意見をうかがいたいと思います。

自然と私達の間での通訳として、また自然にかかわる行政人として、森を育てるボランティアが自然環境保全の担い手として育つことに強い期待をこめて講習をしてくださった須田隆一さんに心より感謝もうしあげます。

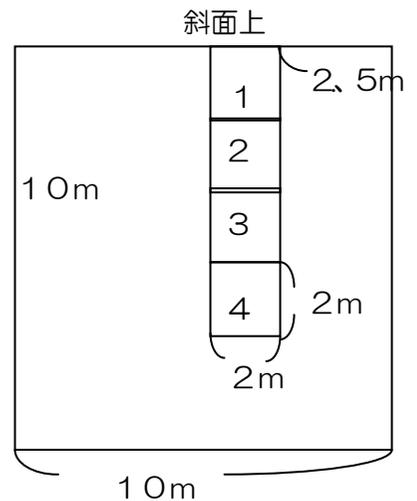
カブトムシの森における林床植生調査の報告 (02/7/28 勉強会で実施)

以下の1から3の手順で、植生調査を実施しました。(調査結果は別紙)

1. 小区画植生(草本層)調査

《2m*2mの範囲》

1999年秋まで草本調査をおこなっていたコドラートAの中に右のように連続した4小区画(1~4)を設定し各小区画毎に出現した種などを記録。



2. 調査区(コドラート)林床植物調査

《10m*10mの範囲》

コドラートA内で花・果実をつけている植物を記録。

3. 調査区(コドラート周辺)林床植物調査

《50m*50mの範囲》

コドラートAの周辺で花・果実をつけている植物を記録。

右ページ用語 *被度の階級値(植物社会学的調査による)について

| | | |
|-----------|---------------|----------|
| ある種が調査面積の | 3/4以上をおおうと | 被度(ひど) 5 |
| | 1/2~3/4をおおうと | 4 |
| | 1/4~1/2をおおうと | 3 |
| | 1/10~1/4をおおうと | 2 |
| | 10%未満1%を越えると | 1 |
| | 1%未満 | + |

なお、調査区を4等分する十文字や20cm四方の枠(2m*2mの場合、被度1%に相当する)を巻尺や折れ尺などで実際に作り、その種によっておおわれる部分を1ヶ所に寄せ集めた場合を想定して目測すると、正しい測定の見安となります。



写真左・カブトムシの森で小区画内の植生を調査しました。
写真右・アカマツ林で被度調査などを練習しました。

草本勉強会当日のOHP資料は、講師の御厚意でコピーさせていただきました。これと当日配布資料をあわせファイルし、ボランティアルームで閲覧できるようにしております。